

福岡市都市景観条例制定10周年記念対談

「21世紀・福岡の都市景観」

福岡市長

桑原敬一

九州産業大学教授

中村善一



撮影＝志賀賢

福岡市では、都市にゆとりやうるおいを求める市民意識の高まりを背景として1987年3月に「福岡市都市景観条例」を制定し、都市景観賞、彫刻のあるまちづくり、シーサイドもち地区に代表される都市景観形成地区指定をはじめとした、都市景観形成のための諸施策を推進してきた。この取り組みも開始から10年が過ぎようとしている。そこで条例制定10周年を記念して、桑原敬一・福岡市長と、福岡市都市景観審議会会長の中村善一・九州産業大学教授に、福岡市の景観の魅力や地域の個性を生かした21世紀のまちづくりについて語ってもらった。

対談

21世紀・福岡の都市景観

桑原敬一 福岡市長
中村善一 九州産業大学教授

LANDSCAPE FUKUOKA

第2
21世紀・福岡の都市景観



10年を象徴するシーサイドももち

中村…都市景観条例が福岡市にできましたから今年でちょうど10年でございますが、市長がご就任になったのが1986年12月でしたから、同じく10年が経過したわけですね。この10年間、福岡のまちの姿は見違えるほど立派になりましたし、本当に活力のあるまちになったと思います。特に1989年の「よかトピア」を契機にして、シーサイドももちあたりがかなり変わりましたけれども、思い入れがたいへん深いのではないのでしょうか。

桑原…そうですね。おかげさまで、シーサイドももちは、すぐれた都市景観が創出されているわが国を代表する地域ということ、建設省が推進している「都市景観大賞」を昨年いただきました。たいへん光栄に思っております。

私が市長になって考えたのは、まちづくりというのはそのまちの歴史、文化、風土とか個性を生かしたものでなければならぬといつくづく思っていました。まちづくりの理念なり、都市の戦略みたいなものもしっかりしておかなくてはならないというのが活動の原点でした。それで、6000

人を超える市民の参加の中で、1987年に福岡市基本構想をつくって、4つの都市像をつくりました。端的に申しますと、福岡の悠久な2000年の歴史と、アジア大陸から海を媒介しているいろいろな文化がま

ず福岡に入ってきている、文明のクロスロードといわれる福岡の性格をきちんと受け止めてまちをつくらうということで、その「海に開かれたアジアの交流拠点都市」というひとつのキャッチフレーズの中で、1989年にアジア太平洋博覧会を「海」と「アジア」のコンセプトでやったわけです。福岡市が今、全国のみならずから高く評価されるとしたら、私どもはやみくもにやったのではなく、ひとつの描かれた目標に向かって民と官が役割分担しながら、いっしょに進んできたからではないかなと思います。

中村…特にシーサイドももちを拝見して見ますと、福岡市の都市の精神みたいなものが読みとれる。歩いていて若い人たちがかなり感動するまちになっていると思います。

桑原…私が市長に就任した当時は、約6000戸の住宅供給を目的とした計画で埋め



桑原敬一（くわはら、けいいち）
1922年福岡市生まれ。
東京大学経済学部卒業。
労働省入省。労働事務次官立
福岡県副知事。労働事務次官立
副知事。1986年福岡市長
就任。
1995年7月地方分権推進委
員会委員に就任。

立て認可をいただいていたんです。市の将来の発展を考えるとこれではいけないと思って、近未来のまちをつくってみようという提案をして、今のようないくつかの計画に見直し対応する文化、スポーツ、レクリエーション施設や、福岡の国際化や情報化を先導する施設等を配置し、これらを通じて人・情報・文化が複合・交流する、21世紀を目標した未来型のまちづくりを推進しました。あのままの計画だったら、今頃は売れない住宅用の土地が空き地となってまだいっぱい残っていたのではないかなと思います。

中村…それであそこに福岡ドームができた、中国や韓国の総領事館ができたり。

桑原…あそこは、スポーツレクリエーションゾーンとか、情報文化ゾーンとかですね。韓国総領事館は、今では韓国でもほとんど建てられることのない韓国固有の建築様式の建物ができました。瓦もすべて昔の瓦です。材料をほとんど韓国からもってきて、韓国の企業がつくってくれましたね。私は非常に国際的な協力を得たと思っています。お隣の緑の屋根の中国総領事館も中

国風でよいですよ。

中村：確かにすばらしい。ふたつの建物は、福岡市の都市景観賞を早々と受賞しましたね。

都市景観形成の基本は地域性

中村：それから、最近ではキャナルシティ博多が全国的にたいへん注目されています。あれは民間主導の再開発事業ですけれども、市もたいぶ助言をされたとお聞きしています。

桑原：福岡市は、博多と福岡が合体してできた双子都市という独特の構造をもっているのですが、博多部が今、非常に沈滞している。なんとか双子都市の発想であそこを息づかせようと考えて、キャナルシティと下川端の再開発事業ですね。下川端は今、建設中ですが、ご存知のとおり都市未来という株式会社をつくりまして、「博多座」の歌舞伎や、アジア美術館など、アジアの文化をこの下川端を中心として根づかせようとしている。キャナルシティは米国系の映画館があつて、劇団四季の西欧ミュージカルがあり、セガが入って新しい情報文化がある。どちらかというと旧と新、アジアと欧米という対照的な魅力をねらっています。

中村：都市景観的にみても、あそこが長い開空地でしたので沈滞した雰囲気でしたけれども、キャナルシティみたいなすこい建築の集団になると、活気が違ってまいります。

桑原：都市の中の都市ができたという感じ

です。人のまねをしなかったのが非常によかつたんじゃないでしょうか。シーサイドももちろんそうですが、これからのまちづくりは人のまねをしない。特に東京のまねをしない。東京にないものをつくるというのが魅力じゃないかと思っています。

中村：明治以降、わが国が中央集権国家となつて、確かにわが国の経済力はたいへん成長を遂げました。特に戦後。しかしそれがあまりにも急速だっただけに失つたものもたいへん大きかつた。その象徴が、私は全国どこへ行つても同じようだとわかれるわが国の都市景観に表れていると思います。しかし、今からはそれぞれのまちが、その地域の特性、地域の個性、あるいは文化、歴史、そういうものをいかに生かしているまちをつくり出していくかという時代に入つてきたと考えています。

やっぱり、市長がおっしゃるように、画一的ではないというか、地域の歴史とか自然や文化を基本にして発想するというのが、都市景観形成の原点です。

桑原：私も、その思い入れがみなさんに浸透していったのがよかつたと思います。だから都市景観賞もオヤツというものができていますね。民間でも非常に独創的なものをおつくりいただいているのは、そういう個性の表れでしょう。だいたい博多の人は個性があるはずなんです。ちよつと東京のまねをしたいなという時期がありましたからね。それが21世紀を前にして気がついたという感じですね。

中村：都市景観賞ができた1987年というのは、市長もたびたびおっしゃっている



福岡県大博多区福岡市中央区地行浜には第5回福岡市都市景観賞を受賞



1999年再開発事業の一博多座(博多区下川端町)

んですが、大隈秀吉の町割りから400年にあたると。その400年目に地方分権に取り組んで、個性あるまちをつくらうという方針を打ち出されたのが、都市景観の面からもひとつのすこく波にのつたような福岡の状況をつくり上げたんじゃないでしょうか。

桑原：やっぱり時代認識というのがまちづくりには必要だと思うんです。ガラガラとまちづくりをするのではなく、今どういう時代なのかという時代認識が大事だと思います。福岡は4世紀ごとにダイナミックに栄えた時代があるという400年説をみなさんに申し上げたんです。最初は話が大きいというのをいわれたんですけど。まあ、事實は事実ですから。何か読んでいましたら、「どんな理論よりも歴史が一番強い」というんです。どんな理論よりも事実がやっぱり強いんですね。歴史から学ぶことが多いですね。

中村：やはり福岡にはそういうひとつの歴史があつたんでしょうね。時代時代を画すような。それと、「海」と「アジア」というテーマがすばらしかつたんでしょうね。

桑原：コンセプトをもたないまちというのが案外多いですね。まちづくりというのは、東京の大学の先生とか、何々研究所から指導をうけるとか、そういうことではないんじゃないかと思うんです。市民といっしょになつて、多少できが悪くてもいいんです。自分たちがつくつたというものに対して誇りがあればいい。人まねというのは、絵かきさんでも上手にかくだけではだめで、その人がもっている個性がで

てこない、本当の絵かきとして大成しないといわれますよ。だから、器用な人は似顔絵書きみたいになってしまう。そういう意味では福岡は、歴史的にもった遺伝子に、ものを考え、独創していく発想があるんじゃないかと思うんです。

中村…実は、地方分権と都市景観とは関係性が非常に強いと思うんですね。市長がおっしゃっている、市民によって方針を決めていくという基本が、福岡のまちの個性で魅力的な景観になってだんだん出てくるんじゃないですかね。

緑、そして自然との共生について

中村…もうひとつ、福岡市は、山と海という豊かな自然に囲まれて、南公園から舞鶴公園、海際の西公園まで緑の帯がずっと中心市街地に伸びてきて、たいへんすばらしい緑の骨格をもった都市ですけれども、緑についての思い入れは何かおありになりますか。

桑原…そうですね、油山とか背振山地、玄界灘とか特に博多湾、それに室見川とかすぐくうるおいがあります。本当に福岡市は自然に恵まれていますからね。

私は基本的に人間は生物ですから、緑から酸素をもらって生きていますから、緑を無視しては生きていけない、自然と共生していかなければならないという原点があると思っています。

20世紀は確かに目覚ましい経済発展の時代だったのですが、場合によっては自然を破壊して発展してきたわけですね。しかし、バランスを失えば自然の報復というのは必

ずあるわけです。したがって20世紀が理性の時代とするなら、21世紀は感性の時代じゃないかなと。理性というのは科学万能ですね。それではやはり行き詰まる。だからむしろ感性の時代。それはまちづくりとしては、ハードじゃなくてソフトですね。1995年に開催しました「アジア太平洋蘭

会議・国際蘭展」は、花と緑あふれる都市づくりを念頭に置いて開催したイベントでした。また今後、地域の森みたいなものを、市民、企業、行政が一体となって創造していくことで、自然の大切さ、緑の大切さを再認識することが、自然との共生をめざすまちづくりに必要だろうと思っています。

福岡市が10年前、すでに都市景観という感性をまちづくりに取り入れたのは、非常に賢明だったと思います。

中村…感性の時代というのは進んだお考えで非常に共感しておりますけれども、もうひとつ市長は「ハートフル」という言葉をよくお使いになっておられる。感性とハートフルをいっしょにしたらさらにすばらしい都市ができそうですね。

桑原…同じような意味なんです。最近の世相を考えた場合に、確かにモノは豊かになつたけれども、心が貧しくなったのではないかと、私はやはり心を取りもどすという、教育を含めて、非常に大きな課題を背負っているんじゃないかなと思います。今、それはもう社会生活、学校生活すべてが総反省する時期じゃないかな、という意味で、ハートフル。人間はひとりでは生きていけない。特に少子高齢化社会になってくると、社会の中でお互いに助け合って生きていかないと、阪神大震災のようないざというとき



中村 善一（なかむら ぜんいち）
1928年久留米市生まれ
日本大学農学部卒業
住友大学客員教授、九州産業大学五福学館教授を経て、1972年より福岡大学学術部教授、専門は、景観設計、環境デザイン。

きにお年寄りや障害者が助からない。そういう助け合いの時代。それが先程申し上げたハートフルとか、感性の問題です。それがないと人間は生存できないんじゃないでしょうか。自然と同じように、人と人との共生というのが大事なんじゃないでしょうか。

中村…私もまったく同感でございます。環境が人間を育て、人間がその育てられた感性で環境に働きかけて景観をつくっていくわけですから、景観というのはただ単に視覚的なものではなく、もう少し奥の深い、幅の広い概念であって、景観と人間は一体関係にあるのではないかと思うわけです。

感性を育む景観都市

中村…私は今、福岡がこれからの世界に通用する国際都市となる最大のチャンスにあるような気がしますが、21世紀のまちづくりについて市長は「感性の時代」だとおっしゃいました。それには、働き、生活する都市環境そのものが楽しくならなければならぬ。これからのまちづくりにおいては、「美しさ」「やさしさ」「思いやり」などの人間の感性を価値観として、日常に接する都市景観をいかにして育むかという視点が、ますます重要になってくると思います。

市長の奥深いひとつの理念を、21世紀の福岡市の都市景観に大胆に表現していただけないでしょうか。

桑原…そうですね。やはり、私は個性のあるまち、それは歴史から学んだし、海とか

山とかに囲まれた自然に恵まれたまちをどう生かしていくかというものは、それは先程申し上げたように福岡はアジアの風が吹いているまち、アジアの人が福岡にいつてみたいとか、住んでみたいとか、アジアの人々が共感を感じるようなまちにしたいなと前から思っているんです。

アジアマンスを始めた年に、あるマスコミがインタビュウしまして、青年に「アジアをどう思いますか」と聞くと、「アジアというのは学ぶことがない、ださい」といったんですよ。それで、そのインタビュウーが「あなたはアジア人ではないんですか？」と聞いたら、エッ！て顔をするんですね。自分はアジア人ではない、欧米とアジアの真ん中の地域に住んでいる人間なんだと。それはつまりどこにも属さない、自分のまちに愛着をもっていないことなんです。そういうことではいけないわけですね。私たちが住んでいる市民が、アジアの一員としてアジアの人々から愛される、尊敬される、そういう人々が住んでいる福岡のまちづくりをしたいなと思っております。

そのためには、まちの景観も例えば福岡にきたら韓国総領事館が韓国のいわゆる昔の建築様式で数百年前のそのままである。中国総領事館もそうだと。あるいは博多の町家があり、そういう歴史的なものを生かしながら、アジアの人々が違和感なく、私たちと同じ文化をもっているんだなと感じてもらえるようなまちにしていきたい。そういう意味でアジアマンスをしているんです。「アジアフォーカス・福岡映画祭」や「福岡アジア文化賞」も同様ですし、今年「アジア開発銀行総会」もおこないます。

昨年オープンした総合図書館も、福岡に

来ればアジアの映画がいつでも見られるようにと映画館をつくりました。郷土の作家コーナーをつくり、アジア文化賞をおもりに作った方の著書のコーナーをつくり、ふつうの図書館とひと味違った、ひとつのアジア志向の図書館にしました。

今問題になっている屋台も、ふつときて屋台というのが福岡にあるんだという安らぎを感じるとするならば、その価値も認めなければならぬんじゃないかなと思うんです。交通問題で確かに難しい議論もありますが、環境とどう調和をするかなど、たいへん難しい課題ではありますが、やはり人間の知恵で考えねばならない。温かみとか、来てみて親しみを感ずるとというのが本当によい都市景観だと思うんですね。

中村…私も屋台問題研究会の委員になってはいるんですが、やはり、人間としてそこに溶け入れるような都市景観でないと。

桑原…きれいな、お金をかけた建物を立てただけの都市景観ではいけないと思います。

中村…金属とかガラスとかコンクリートで固めたまち。そういう景観だけではだめですね。屋台の布、テントや紙や木でできたような柔らかい存在感というのが魅力なんです。それに、やっぱり屋台がありうるというのは、その地域の人が同じ仲間だということですね。隣の人に、まっ一杯どうですか！といえる。そういう雰囲気のみでしかできない。それが福岡の特性なんですよ。

桑原…知らない人の肩をたたいて、ヤア！



アジアマンス
アジア太平洋フェスティバル



博多の森球場に設置予定の彫刻「PIMP POMPOM」の模型

みたい。そういう、屋台そのものよりも屋台を取り込んでるそういう人間的な雰囲気というか、それもひとつの景観でしょうが、そういうのも大事ですね。お互いに仲間同士になっていく、それがアジア的だと思います。

都市景観はハードもいりますし、ソフトもいりますし、それからやっぱりハード。3つの要素をもったものが都市景観じゃないかと思っています。

中村…ハートというと、福岡市では14年前から「彫刻のあるまちづくり」に取り組んでこられたんですが、芸術作品を美術館ではなく、だれでもが自由に行き交うことのできる「パブリック」な都市空間に置くことで、日常の文化性、芸術性を高めていくというところに重要な意味があると考えています。私も彫刻のあるまちづくり委員会の委員長をしておりますが、今年、博多の森球場の入り口にフランスの彫刻家のおもしろい作品がおめえしますね。

桑原…フランスの女性作家の作品ですね。私もこれがいだろうと思っていたいへん気に入っています。まあ、彫刻のあるまちというところで、イメージを一生懸命作っていかうとしてますので、いい作家のシンボルがまた、博多の森を有名にさせるんじゃないかと思っています。

中村…これもまたひとつの感性を育む景観都市、福岡の象徴みたいになるとよろしいですね。

日常の都市空間に豊かな感性が息づく、アジアの交流拠点都市・福岡の21世紀の都市景観に大いに期待します。■